京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第十八卷　第四號

大正十三年四月一日發行

故戸田海市博士肖像并に哀詞

論叢

虞夏書に見はれたる政治經濟思想……法學博士　田島錦治

階級の動學的考察……文學博士　高田保馬

獨逸最近の社會學論……文學博士　米田庄太郎

植民地の經濟政策に就きて……法學博士　山本美越乃

時論

不景氣と租稅……法學博士　神戸正雄

說苑

一子相續制度に就いて……經濟學士　八木芳之助

客觀的勞賃論の史的發展……經濟學士　森耕二郎

雜錄

戸田博士逝く　○戸田海市君の追懷（西川幾太郎）　○戸田博士を憶ひて（福田德三）　○戸田君の追懷（神戸正雄）　○追憶の斷片（河上肇）　○戸田博士と私（河田嗣郎）　○戸田先生を憶ふ（小島昌太郎）　○戸田博士と大阪市勞働調査事業（關一）

それは明治三十九年から四十年にかけてこのことで私が學生として京都大學に在學した最後の年であつた。そして戸田先生は留學から歸られたばかりのホヤ々々であつて、當時先生は中々元氣がよく又かなりハイカラであつた。私の聽いた講義は貨幣論で何でもゼヴオンスの原書を用ゐ乍ら補註解釋といつたやうな講義をせられたと氣憶する。講義の內容等はもうすつかり忘れてしまつたが、たゞ先生が通說にばかり捕はれず獨創的な見解を示されたことだけは私の忘れ得ない所である。講義振は其の時分から洵に丁寧親切なものであつて例の嚙むでふくめる式のものであつた。

私が個人として先生に親炙したのは私が卒業論文として家族制度論を書かんとして、其の材料の取扱方や論文としての攝成方法やに就いて教を請はんがために先生の私宅を訪れた時が初めてゞあつた。其頃先生は今の河上博士邸の舊家屋に住むで居られた。三十九年の冬のことだつたが其頃から寒がりだつたと見へて日本間の

戸田博士と私

河田嗣郎

私は戸田博士に教はつた學生の一人である。

中へストーヴを入れて居られた。或は其時分既に少しは健康に異狀が崩して居たのか陰氣な樣子をして居られた。

其後私は卒業して東京の國民新聞社へ入つて居たら四十一年の春議會の開かれて居る頃に、先生は病を得て伊豆の修善寺へ養生に出て來られた。私は社に斷りなしに一日先生を見舞に出かけた。先生は痩せこけて居られたけれども元氣はよかつた。其夜は一泊して共に入湯などした。湯の中で先生は自分のからだを示して之は戸田ではなくて戸田の骸骨だから見て呉れ給へなどいつて笑はれた。溥暮浴室に湯氣の立込めた中に浸つて二人で心靜に物語つた當時の光景が今に私の眼底に在る。翌日私は東京へ歸つて出社したら私の不在中社では私の受持つべき用件があつて私を探したさうでお目玉を頂戴した。そんなことで當時のことを私はよく氣憶して居る。先生は時々手紙をよこされた。中に「小春日や障子の蠅の力なき」と書送られたのもあつた。私は「編輯局小春日和のうらめしき」などゞ御返し申上げた。

後間もなく先生は東京の麻布胃腸病院へ移られた。私は新聞社からの歸り道に屢々先生を御見舞した。新着の獨逸の雜誌を持て行つたり、私が書いた社説の載つて居る新聞を持つて行つて先生の批評を請ふたりして居た。先生は諄々として且つ敎へ且つ論せられた。論じ乍ら手づから紅茶を入れて自らも飲み私にもすゝめられた。自分の紅茶に恐るべく澤山コンデンスミルクを入れられるので私は常に驚異の目を見張つて居た。敎へられた理論や政策は忘れてしまつたが紅茶のことはよく憶えて居る。

先生が京都に歸られて後河上博士が我が大學へ來られることになつた。私も間もなく後を追ふて母校へ歸つた。それから後は公にも私にも先生の指導薫陶を受ける機會の豐富だつたことは謂ふまでもなきことである。特に先生は政策論に深き興味と造詣とを有つて居られたから、同じく政策論に興味を持つ私に取つては先生の指導は直接に大いなる感化を與へて呉れた。尤

も私の思想の根柢と先生のそれとの間には大分大いなる徑庭があり從て政策論の立場に於ては多くの場合私は先生と異つた所に居る外はなかつたが私の瓦礫が先生の玉に依つて琢かれた所は實に多大なるものであつた。そして先生は理論經濟學からはいつて來た人であるから、政策論に於ても常に理論を離れず、事實を眞くに理論を以てし、然かもその行き方はいつも演繹的であつた。つまり大前提を立つるがためには事實を捕捉し實狀を究むるに努力せられたが、一度その大前提を立てた以上は一瀉千里に理論で進むで行かれた。そこに先生の政策論の大いなる强味があつた。同時に又そこに弱點もあつたと思ふ。

茲數年前までは先生は健康が惡いといひ乍らもまだ中々元氣がよかつたから食物は小量の牛乳と紅茶と角砂糖とビスケット位しか攝つて居られないに拘らず、常に勉强して經濟界の實狀を知るに努め毎に堂々たる論陣を張つて居られたが、茲二三年とんと弱り込まれたやうであつた。從て議論も多少光彩を減じて來た。本論叢に表はるゝ論文の數も急に減つて來た。私は先生の上を思ふにつけ世の中が暗くなり行くやうな感がした。ぴつたり病褥に親しまれるやうになつてからは先生にお目にかゝる機會も甚だ稀になつてしまつたが、終に去る三月五日といふに多年の病室に北枕に永眠せられた先生の變り果てた姿を見なければならぬ悲い日が來た。越えて七日先生の尊き遺骸を華山火葬場に送つて先生の「死すべき部分」と永久に訣別した。悲痛何ぞ堪えん。